

特42
18
445

合浦
堂田敦盛
草紙院雨
六浦
松山鏡
十

255
549

白不家
觀十世
心

季末知 五番目 略陽條

合浦

シテ 發童 人子

ワキ 里 人

七月 二番目

生田教威

シテ 教 威

ワキ 方 教威ノ子

四月 三番目

草紙洗町

シテ 小野ヤ郎

ワキ 方 官王 何内船娘 紀生志之 大伴星主

九月 二番目

六浦

シテ 里 女 後テ 楓ノ精

ワキ 傳

季末知 五番目

松山鏡

シテ 俱生 林

ワキ 方 父母ノ重

合浦

早月



是の唐土合浦の浦小住居する者

五ノ人今自もろ経るよ小住浦小

出給ある城跡名と存作シテモト上ノ

のそここまいけや白浪乃龍の於城

物於あり。如中ノ小住屋の内は阿多也

まし浦ノ一夜の宿を切後 目元

明治 45. 7. 23 内交

早暮^トて^ルル^ト一^ト暮^ルる^ト宿^ルる^ト非^シく

ま^まま^まぞ^ぞ一^ト非^シた^カを^シ惜^ムま^し。

村^ノあ^ま宿^リ一^ト夜^ノ宿^ルる^ト後^ノ

か^らか^ら鶏^ノ亦^モ面^モあ^らや^久方^ノ

か^らあ^のこ^やお^取ゆ^る。床^もぬ^れ。

あ^ま宿^リの^ツぐ^の軒^を木^陰や^一樹^乃

あ^ま宿^リの^ツぐ^の軒^を木^陰や^一樹^乃

陰^の者^りも^い世^あら^ぬ想^{あり}あり^の河

流^と深^く志^る合^浦の^う舟^乃江^の

四^り轉^まあ^ら命^盡る^を惜^まと^志

行^とる^中ま^た又^お入^ル

あ^らぬ^と名^跡法^名あ^らぬ

今^も行^をか^らむ^ま種^の較^人と^ら

い^の真^の精^{あり}命^をし^らむ^まら^せ

い^の真^の精^{あり}命^をし^らむ^まら^せ

一。報謝の爲に身ありきり我あり海の
 衆乃玉絶ぬ寶と成ま也 數人
 海に玉をばりて命息を寶珠と
 もききて合浦玉をばりて命息を
 あり海の浪り玉をばりて命息を
 眞と成りて命息をばりて命息を
 きり海をばりて命息をばりて命息を

中未年
 出馬
 又旦
 龍女

一。如意の寶珠と釋き玉をばりて命息を
 就の法と成りて命息をばりて命息を
 玄白眞ありて命息をばりて命息を
 きり海をばりて命息をばりて命息を
 ありて命息をばりて命息をばりて命息を
 玄白眞ありて命息をばりて命息を
 きり海をばりて命息をばりて命息を
 ありて命息をばりて命息をばりて命息を

二世の福がひも成就なるべし是迄か
 里也織つる綾の浦の金浦たまの二度
 帰る故の千秋萬歳のきからしむを
 子秋美舞の寶のたまの金浦か
 浦子ぞとて海りのま

生田敦威

早白
 是の黒髪は髪と人とは中者
 て作らば是は後りの人あると
 一人髪無河集箱出下向の時よ
 里松の下に二歳さうりある男子
 うの髪は手紙年箱の蓋は入尋
 帯に柄拾遺くはと人い後

思ひきくせぬ梅の影さくあはく
 了くして給ひ依程よまやし業よ
 出御の依父母乃あきかんと歎息白
 依ほごよ後法に及けりやとあまの
 かたりくば社家の申よりわらう女
 性乃走出我子まゝる由依紙びそ
 うに御書らむと一年一乃答まぐ封

此の依り敷成と御子にぐおつま
 一依げりやとあまの御ひてあまの成
 ともあつたあつたあつたあつたあつた
 舞乃の神(ま)せらる方(ま)由信ら歌ひ
 て。千日詣給へん日は早海(ま)まゝ
 ほごよ同道(ま)たあまの明祚(ま)入事
 中(ま)はあまの明神(ま)まぐ由社

思ひたゞくしむれば海の底にゆくや
 りて給ひて給ひて給ひて給ひて
 世の作父母のあまもを歎け白
 作ほごよの鏡法にたけりやと志まの
 かりくば種家の申よりわらう女
 性乃走出。我子まごよ由作紙びそ
 うに御書らむと一年一乃答まぐ封

世に信り教成と御子にまおひま
 一作げりやと志まごよ由作紙びそ
 とも父の志まごよと給ひて給ひて
 舞乃の神(まごよ)まごよ由信ら教成
 て。七日指給ひて日は早海(まごよ)まごよ
 ほごよ同道やと志まごよ乃明神(まごよ)入集病
 中(まごよ)まごよや志まごよの明神(まごよ)まごよ由信

油さうら復の懐の山路や一はる生
田は暮よまろゝるは都を程進と
一門のくぐりまあるを都折帯よ
乾頼義経れその懐の雲や夜乃あ
まのくづり戦をくも平家の運も
はまられあけを病平あわくと
皆教ご子成さるる教も信は田門

乃が身を捨ぬ徳かするぞよあ
まけるまろけやあまはるまろけ
他あるがらあやこあうむの袖われ
公御子よをぬ心邪中義あ邪よえ
左のめらつもの者ぞ行圖王よりれ
所はともけり母の眼とあつおにを
乃海集はるまろ圖王らあを

善入奇を聞だもと存作會釋引社
奇れ又あましと尋ねよ聖徳太
子の救世乃提圍片圍山の世いを路
生よひろめ給板きの日内裏みく
渾うの合あお入ちかみくお町が相
年よのくろぬしとほあびぬひ
て氷邊乃茶とら子題と給あり

當りねきしるも氷邊乃茶と題
みうらじくねぬらるまあふは
福とくう地茶け飯のうましくあひ
かふらんけ奇とやうく徳母の字は
めんク如何よむとら奇とあまき有が
向んカ作家ぐのク行を聞てあるぞ
△ありあぐにまふと種とく成給ぬ乃

島にうねりまじりてうきあはれぬ
りや左様までいふあはれぞ道はたたる
ま事なる道はあはれなきまじりて
乃とす不得いふ事あはれぬ
まじり使の言を万葉の草紙より
のし帝へ古事と海の中ウチノナカの自ミる
海奇入合よあはれぬあはれぬ海ノミあはれぬ

まじり代の奇合オノサレきく涙ナミダしてまじり
とあはれむアハレム時トキもはなき卯ウサギかえ
清涼殿の御ミコ念ネンあるれぞ花ハナやうに
らそみえたりきれオノサレかくて入イレ死シ希ス
人恋所歌ヒトコイノカとをきキた乃ナく續ツくる
短冊タビタビとが衣イもくクと出デ影カゲ乃
前マエより置オキたりル依ヨ所ト前マエ人ヒト

浅き^{シヨク}の^カ印^{フシ}まら^シて^シぬ^クか^ク申^ス
 なる^シの^シ草^{クサ}子^コの^シ方^{カタ}塔^{トウ}題^{タイ}を^シ良^{ヨシ}味^ミの^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}
 草^{クサ}と^シは^シみ^スえ^シの^シ根^ネも^シ積^{ツキ}入^イ志^シと^シ祭^{マツル}
 たる^シべ^シの^シ作^{サク}者^{シャ}の^シ報^{ホウ}と^シ平^{ヘイ}安^{アン}を^シあ^シり
 引^{ヒキ}起^キ方^{カタ}葉^{エフ}の^シ系^{ケイ}良^{ヨシ}味^ミの^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}
 志^シ撰^{セン}者^{シャ}の^シ諸^{シヨ}兄^{ケイ}等^{トウ}の^シ叔^{カス}の^シ七^{シチ}子^シ首^{セン}に^シあ^シん
 て^シ皆^{ミナ}わ^シら^シぬ^シが^シ志^シら^シぬ^シ等^{トウ}の^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}

方^{カタ}塔^{トウ}系^{ケイ}の^シ草^{クサ}子^コに^シ較^{カク}多^タけ^シなる^シ作^{サク}ら
 ぬ^シが^シ序^{シヨ}なる^シが^シ久^{キウ}く^シ究^{クウ}く^シその^シ根^ネを
 あ^シら^シぬ^シが^シ志^シら^シぬ^シ等^{トウ}の^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}の^シ夜^ヤ
 通^{トウ}娘^{ニョウ}乃^シ流^{リウ}あ^シり^シの^シあ^シら^シぬ^シが^シ志^シら^シぬ^シ等^{トウ}の^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}
 つ^ツま^マら^シぬ^シが^シ志^シら^シぬ^シ等^{トウ}の^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}の^シ道^{ドウ}理^リ
 あり^シ根^ネの^シあ^シら^シぬ^シが^シ志^シら^シぬ^シ等^{トウ}の^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}の^シ猿^{サル}丸^{マル}
 大^{ダイ}夫^フ乃^シ志^シら^シぬ^シが^シ志^シら^シぬ^シ等^{トウ}の^シ字^ジ撰^{セン}者^{シャ}の^シ猿^{サル}丸^{マル}を^シ以^ヒ

草紙

...

て我ら評人前よりきこえりやまはら
 支の古奇あらん 苑の蔭ゆくやま
 賤乃 思はぬあはれもあらはら
 行はく古奇いふあはれもあらはら
 空雲とさきとてあはれもあらはら
 士乃あはれなる大將や四病八病三代
 八部あはれもあらはら

やまりのめいも今もあはれ
 不思議やまはら 事代平三十三字
 まはらまはらまはらまはら
 是乃あはれまはらまはら
 思はらまはらまはらまはら
 度々下りまはらまはら
 もたはらまはらまはら

己作の行は法身平志と病まき
文字のまきつ手平志とて作程
子若子母あらひてはまきす
中作 空の町を申すまき
尚らばあらひて見よと中作人
畏てのくつ小町勅護まきあま
いそいでまきとあらひる人

論言あれはうねくく落ふ
涙乃玉なるまきとてかたう
うかて隠は双感とあらふんと
私奇はうらわのまき深草く版ま
うけくあらまきとて天乃川
志の秋の七日の夜也 荒ま
の積まき 梅の白ひやまら

草紙

歎よまの松は多代迄松ゆ多代ま
 づ四海乃彼平四方乃國を元母
 乃とゆもさるぬ御代こそ貴皇
 此佳例あまき大和奇れねりは
 らうねの出るきそさるをのき
 此守里終る神國あれは都
 此妻も長岡よ花の朝乃妻を

此とる私奇乃道こそめくた
 々々

せしけら粉まじりてきり都も加様
 乃紅紫れいへさうまじり思入あるが
 堂に庭子概の作がまき余の本に
 勝き唯夏あごちのさくまき葉
 毛の紫せ淡作いし孫謂のあは
 事いひまじりまじりてゆめさうひま
 やとあひあぢくは僧を何事

せし作ぞ けんが是の都より始て
 此可い見た者まで公家まじりの紅紫今
 を盛と刀のそてゆに長くある概の
 一葉も葉をの作程よふ書をか
 一作 文よくは所見とさうめ
 て作いし人鎌倉の中納言為想
 と申し入る葉をいしとて出前

に來り給ひし時をさへくつ紅葉のま
があつしに洪水平子浪り紅葉雲
深くきかむひあつり志を爲相郷
あへずいらにきく此平子晴雨
あしおさたきく庭の紅葉をさ
病はゆるし今よもいらちを
苗あつ作 西白のは詠予中か

かき教あらぬあはれいぬ平向の
きあにかくさつりあつあはれ
平に難とらて袖の時雨ぞ山に
さただの 荒有程の平向也
あはれ平の西目あつあつ作
備くはまは爲相のは詠予より
よみ業と苗あつる習わらあつ事や

らん 今に法を審む所理の
 まろえり奇し預りし時ころ本
 心よさふやうからぬあひまの山里の
 人も通るぬ古寺の庭よわき先
 立くおぼせせまはいつて妙あり
 所縁予も形るづまの功成る遂て
 身退くる是く天乃道ありといふ

古た詞と深く信し今におぼせと苗
 ぬらぬ常盤木のこく也 是く
 不思議の法華即此木の心と云ふ
 まど志形し知しある所身空て
 いかん人までまもるぞ今も何
 もういへむいま種をけ木の精ある
 が。中僧をうけしまもるはなぬよ眼

花ふぞも草の末はむと懸る成はら
 かの妙もを疑ひ終るて猶も昔を
 かる終へ 夫四事折くる草末
 花のましくの時とく 花のまき後
 くのそのまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく

諸人の心も春も咲ぬらん 又も梅の
 花盛なり雲とく 三吉野の花も春
 花のまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく
 花のまきとく 花のまきとく

なすの村時雨子の子きうひきのお茶
もろもろお茶きくきよの山き下茶
らぬ色しとうやまおきてもあは
まの奥乃山里おからり海をた
都人の装も海子の言は茶の露
乃情にむききしん海とまきえ
かきくよ茶茶茶もひちぐのえん

海まは法を授けし果茶えぬ給也
更作月乃夜茶をわい色なき
袖とやうさまの煉乃夜はお茶
を一夜おかしほても茶茶乃あり
て多やあ海ハ聲乃多えが
はくふハ多は鳥も教く鐘も
聞ゆるめがた空の可き六浦

六浦
かうら山う勢映志をりくちか
紅紫ぞの月ニに照テらひてからくき
おの乃庭ニはお節ノあを配テうニ海
申テて降ル山ノ路ヲ行カくニ来ル乃
お乃月ノは行クを思フを来ノの乃月
乃がまをぬハまニくニのニ海ノ乃り

松山鏡

ワキ
是ノ越テ後ニは松ノ山ノ家ノ子ノ位者共ノもの
あくノ板を葉スくニそニまレ妻
おねレ昨日ノきをはあをたをや三
年子成シく作又志形見は娘を入ス
物を山ノ館ノ母を子をと歎ハゆをよ
たいノ屋を作リ巧慮を動てん又を田ヲ

松山

其彼が母れあつて自らての程は持仏堂よ
 立出焼香せざやと云ふの姫サレ上雲とあり
 雨とちるを陽たいたい時とあかしく
 苑とていし雲とまきまきとあつてのト花
 ゆく魚まの目道は関守あまき
 まは母流よ離れあつての心花
 三とあつての心ありあつての心

行つてやらん娘が独りごとを申のつて娘が
 有う父が来りたるぞ持仏堂を
 あけ作の荒やと云ふややらんおと
 立ちまきまのいづる娘相見ぬが母よ
 ねとまきし時をといひ切者世せざやと
 存ひつてきた一族ごとの待よより今
 遠うまきの信者たりは男みあから

おもて平岡一羅^ツなまの^シつ^シく^シあ^シひ^シな^シ
 清^シま^シあ^シひ^シつ^シく^シあ^シひ^シ申^シさ^シぬ^シぞ
 した^シり^シな^シき^シり^シな^シき^シあ^シひ^シな^シ
 痛^シも^シや^シ母^シ前^シた^シを^シ隠^シす^シ
 日^シ射^シご^シ鏡^シを^シわ^シけ^シせ^シあ^シら^シき^シも^シ也^シ
 母^シが^シ泣^シき^シと^シ跡^シを^シの^シこ^シり^シ意^シし^シま^シ
 射^シき^シみ^シつ^シく^シを^シ作^シら^シひ^シ程^シも^シあ^シら^シ

と^シ泣^シき^シと^シ跡^シを^シの^シこ^シり^シ意^シし^シま^シ
 う^シつ^シり^シよ^シり^シ程^シも^シあ^シら^シき^シも^シ也^シ
 足^シを^シあ^シら^シひ^シ跡^シを^シの^シこ^シり^シ意^シし^シま^シ
 そ^シの^シ身^シと^シ面^シ影^シを^シあ^シら^シひ^シ程^シも^シあ^シら^シ
 母^シ前^シの^シ意^シ想^シを^シあ^シら^シひ^シ程^シも^シあ^シら^シ
 目^シを^シあ^シら^シひ^シ程^シも^シあ^シら^シ
 鏡^シを^シあ^シら^シひ^シ程^シも^シあ^シら^シ
 足^シを^シあ^シら^シひ^シ程^シも^シあ^シら^シ

力強しおろおむむのり成り母は行
 了かへんようつひくかへんま
 但まつとおまひ出た事なん漢乃
 武帝乃后事夫人あくら世居る
 了後御門后乃四子あむとあへ給
 ひ内安と耳泉殿の壁ようの明
 言教賢有がも本よ中し給ふ

かまね形あねだあひ笑つ中へ
 うまひぞ増ふとあへんあふ射
 仙人のつあきくふく減后は山深
 七教賢者度思あはば日の夜乃
 隈あきらまに反視書とたまふ人あ
 有かへ教へるまうせて月乃夜露
 へあまふつて反鏡もあつ焼入の煙の

言皆首動しん中。我教は鏡よかひ
 たりん母が教はくおんの申らぬか
 にあしけ松の家かよの筆は夏
 の利せくおまのたさなむさしき家
 さうせんおひりあつたあしりか
 ちん申もよきらひんひと事年
 都より一時鏡と一両買らりてらわら

母よあつたあしりか
 のあかひらまの時姫とあしり我
 ちん思ふ時鏡よかひんか
 ほらよ。我教はくおんの申らぬか
 おもひ教もたね便さるるか
 鏡乃習と語つて教はあしり
 やし思ふ作をあらん娘あしり鏡

夫へくまのふりぬり白衣零落して
 ありて泉は神のいさよを水とて
 せしまれば別ち漢女が粉をそまか
 のて清堂より花とをむとまれ
 も蜀人交をあらまの我も
 伊藤の吉姫よまちあへらる錦の
 ち度まごがためむらよあへりた

和。多程あう。後よあ。又。唐土
 了。ん。氏。ま。く。賢。女。の。え。か。る
 の。世。の。なら。ひ。思。ひ。を。ま。た。え。の。み。ぬ
 あり。是。や。う。り。と。お。ま。り。ん。形。見
 の。か。た。く。く。れ。る。り。ぞ。疎。る。三。日。月
 け。お。ひ。ま。ま。ち。明。く。恨。み。を。た。え。ま。も
 兼。て。う。さ。の。年。月。と。あ。れ。里。は。新。だ。の

秋乃秋更く風乃たよむ傳は
 夫を國乃まこまりあらぬ妹背は
 川あさるき海にまやうもの。楓の
 あよりそかここれ鏡我ひらりあさる
 あさらよ影又まきた半白のさきに
 うちかぬぬらぐあくあさるでまじら
 まのちの物事よ上女くはるくはるくはる

志らあひのこひのこひのこひのこひ
 志がわくは眼を休めむかたのりよひは
 かりまよふことかたのりよひは
 鏡の目れとありまのあさるよ成お
 きり満月乃山坪出碧天を照まて
 やくあひの目もや負女は山坪らんがを
 かがやきあひの目もや負女は山坪らんがを

中
松そよぞの時の暇とまりて
いづれを祈るに候生神のま
昔患をいかにしよの作を蒙り
乃もえし心鉄の志を振
上
を蟬はくからば榮榮よ
死んだまの冥途へ腕の交わり
女鏡のいづれの手を
あまのこ

ひさしまきあめりよ
孝子はめらぬ切かふす
をよくみまじりて
廣く入るも
と合はれぬは
儼とみえらるる花より
虚をいふ多樂

255
549

復製不許

明治四拾五年七月十五日印刷
同 年七月二十日發行

再訂正者 觀世清



發行兼 印刷者 檜 常 之 助

印刷所 江 川 堂
東京市四谷區傳馬町貳丁目

